シリーズ 戦争とラジオ〈第7回〉

敗戦への道

～負け戦（いくさ）はどう伝えられたのか～

メディア研究部　大森淳郎

サイパン島陥落，フィリピン戦，特攻作戦，硫黄島玉砕，沖縄地上戦……。国民の間に厭戦気分が増大しかねない事態の中で，ラジオは敵愾心の振起，戦意の維持という使命を担っていた。日本放送協会はその使命にどう対応したのだろうか。

本稿では，電気通信を学ぶ高等学校生だった高橋映一が手作りの装置で録音した音源を手がかりに，太平洋戦争後期から末期にかけてのラジオ放送に焦点を当てる。

そして，太平洋戦争の敗北が決したとき，ラジオはその原因と責任の所在をどう国民に伝えようとしたのか，新資料から考察する。

高橋映一（2009年取材当時82歳）が手作りの装置で戦時ラジオ放送を録音し，保管してきたことは，本シリーズの冒頭に記した[1)]。それは日本国内に向けて実際に放送されたニュースや番組のエアチェックであり，私の知る限り唯一無二のものだ。録音盤から再生される雑音交じりの音には，聴く者を戦争の時代に引きずり込むような力がある。

高橋が録音機を完成させたのは1944年の初夏のことだった。戦局の悪化は電気通信技術を学ぶ高等学校生だった高橋の目にもすでに明らかで，「いったい日本はどうなるんだろう」と思っていたという[2)]。だから，高橋が録音するのは音楽や落語ではなくニュースが中心だった。「とにかく普通の状態ではないわけですから『これはっ』ていうニュースは遺しておこうと思った」のだ。

高橋が録音した放送番組の中には，録音盤が破損して失われたものもある。現存するものを**表1**に示す。

表1　高橋映一が録音した放送番組（現存するもの）

1944年6月20日	ニュース「太平洋の戦局」
7月18日	ニュース「大本営発表」 （サイパン島陥落）
10月3日	「『起て一億』の夕」 （日比谷公会堂より中継）
10月25日	ニュース「大本営発表」 （比島東方海面の戦果）
10月26日	ニュース「大本営発表」 （レイテ湾における総合戦果）
1945年1月1日	ニュース（元旦のニュース）
日付不明	歌「お山の杉の子」 「ラバウル小唄」
3月21日	ニュース「大本営発表」 （硫黄島玉砕）
6月6日	特攻隊の出撃（録音隊記録）
日付不明	歌「暁に祈る」「荒鷲の歌」 「勝利の日まで」
日付不明	空襲警報

録音盤に付されたメモおよび録音内容より作成

サイパン島陥落，フィリピン戦，硫黄島玉砕，沖縄に向かって出撃してゆく特攻機，そして空襲警報。高橋が記録したのは，絶望的な戦い

の末に破滅に至る日本の敗戦への道そのものだった。

ラジオは太平洋戦争末期の負け戦をどう伝えたのか，国民をどこに連れてゆこうとしていたのか，そして最終的な敗戦をどう伝えようとしたのか。本シリーズ冒頭と重なる部分もあるが，本稿では高橋が録音した戦時ラジオ放送に改めて耳を澄ませ，軍・政府，そして日本放送協会の時々の思惑をさぐってゆく。

1. 国難来る 1944年6月～1944年8月

1944年6月20日のニュース

高橋が遺した戦時ラジオ放送の中で一番古いものは，1944年6月20日の太平洋の戦局を伝えるニュースである。

ニュース（1944年6月20日放送）

> 太平洋の戦局は大東亜戦争始まって以来の重大な段階に立ち至っております。去る6月15日，敵がサイパン島に上陸してからすでに半旬，しかも物量をあくまで頼む敵は，今もなお有力な航空母艦，戦艦，巡洋艦，駆逐艦等をマリアナ周辺に依然行動させ，大宮島，硫黄島に対しても毎日のように攻撃を繰り返しているのであります。

高橋映一 録音

ニュースは，サイパン島に上陸したアメリカ軍が日本本土に向かって着実に進攻しつつあるさまを伝えていた。録音は途中で終わっているが，本シリーズ第1回で見たニュース編集の方針を考えれば，このあとには，それでも日本が負けない理由や，国民が持つべき心構えが語られたはずだ。だがそれは推測にすぎない。今，このわずか33秒の録音で確認するべきは，戦局が「大東亜戦争始まって以来の重大な段階」にまできていることをラジオニュースが明言し，敵の攻勢を隠さずに伝えていたことである。

高橋映一が録音機を完成させた1944年初夏，ラジオはもはや戦局の緊迫を隠すことはなかった。それは例えば，ミッドウェー海戦（1942年6月），あるいはガダルカナル撤退（1943年2月）に際して，敗北を意図的に隠蔽し，あたかも戦局が優位に展開しているかのように放送していた時期とは明らかに異なる姿勢だった。

太平洋戦争後期，ラジオは国民に何をどう伝えようとしていたのか。少しさかのぼってみてゆくことにしよう。

高橋映一が遺した録音盤

情報局の世論指導方針

1943年5月，アリューシャン列島・アッツ島の日本軍守備隊が全滅，11月には南太平洋・マキン島，タラワ島が陥落，戦局の悪化は深刻の度を増してゆくばかりだった。同年12月10日，東條英機内閣は「戦時国民思想確立に関する基本方策要綱」を閣議決定している。「要綱」は次のように述べていた。

> 戦争の実相に基き国難来（きたる）の感覚を極力感得せしめて之に対する反発心と敵愾心を昂揚し

国を挙げて国難に赴くの満々たる闘志と戦意の強化を図ること[3)]

太平洋戦争初期には戦勝気分をあおり立てるように戦意高揚を図ればよかったが，負け戦が続く情勢の中では，日本軍将兵の死に報いる戦いであることを強調し，戦意を維持しなければならなくなっていた。アッツ島守備隊が全滅した2か月後，日本放送協会が編集する雑誌『放送』1943年7月号には，詩人・山本和夫の「霊前に生肝を」という詩が掲載されている。その最後のフレーズはこうだ。

我等は信ずる。/ 勇士の霊前に仇敵の生肝をずらりと供え奉る日の近きを。

年が改まっても戦況は悪化の一途をたどった。1944年2月25日，大本営はマーシャル諸島・クェゼリン，ルオットの将士・軍属6,500人が全員戦死したことを発表，これを受けて情報局第1部放送課が編集する『大東亜戦争放送指針彙報』には「ケゼリン，ルオットの発表と放送」が掲載された。そこでは「ただならぬ戦局である」との認識に立って，こう述べられている。

徒(いたずら)に沈痛すべきではない。否一億国民は沈痛のうちにも来るべき日を期して断固捨身敢闘を新たに誓ったのであり，また誓うべきである[4)]。

指針としては教条的にこう書くしかなかったのだろうが，情報局も国民の間に「沈痛」な気分が広がっていることを冷静に認識していたことがわかる。その1か月後，『放送指針彙報』4月号には「当面の放送指導に就いて」が掲載されているが，そこではラジオの編成方針について次のように記されている。

戦局苛烈化に伴い国内の決戦体制は急速に確立され，一切を挙げて戦力増強に集結するよう着々と手が打たれているが，他面，（中略）ややもすれば陰鬱焦燥の気持が起り，これが戦力増強に好ましからざる影響を与える恐れもあるので，放送は国民の慰安娯楽の機関として，国民の気持を明るく引き立て，明朗闊達な気持を盛り上げるように努めることが今日特に要請されている[5)]。（傍点は引用者）

情報局はそれまで放送を「国策の周知徹底，国論の統一，国民精神の昂揚という大目標に向かってその全機能を発揮」するべき「政治機関」と位置づけてきたが[6)]，今度は「国民の慰安娯楽の機関」だというのだ。竹山昭子は「情報局は国民の間に非戦・厭戦の輿論が起こることを懸念し，この頃から，放送指導の方針転換の必要を考え始め」たと指摘している[7)]。

情報局のラジオによる指導方針を改めて要約すれば，国民の気持ちを明朗闊達に保ちながら，戦局悪化による焦燥感を敵愾心の振起，戦意の高揚に転化することだった。そして，日本放送協会はその方針を具現化するために力を尽くそうとしていた。

日本放送協会の対応

1つの例として『大東亜戦争 放送指針彙報』に採録された『豆宣伝』（1944年5月28日放送）の台本を以下に示そう。ちょうど高橋映一が手作りの録音機を完成させたころの放送である。

『豆宣伝』とは，ニュースや番組の合間にア

ナウンサーが時局の話題を聴取者にわかりやすい言葉で語りかけるミニ番組だった。番組全体のニュアンスを感じられるように，以下，長めに引用する。

『豆宣伝』（1944年5月28日放送）

ここで一寸皆さまにお知らせ申上げます。去る五月一日わがトラック諸島に来襲した敵機の翼にはアメリカの標識の代りにJ・A・P，即ち，ジャップと書かれていました。「キル・ジャップ」（日本人を殺せ）―これは現在アメリカの国内に流行している標語です。最近，倫敦で封切られたニュース映画に，司令官マックアーサーが馬の屍体の前に立って「日本人を残らずこうしてやるんだ」と語る場面が出て来ます。

マックアーサーと最近会った，前の南太平洋艦隊司令官ハルゼーのお得意の言葉は「日本人は猿だ」という言葉です。昨年の夏以来ハルゼーはしきりに「日本人は猿だ」と放言して来ましたが，最近彼は記者団会見でこう言いました。「日本人は猿だ，木からひきずりおろすと『キーキー声』を挙げてなく」と。（中略）

又これも最近アメリカで起こった出来事ですが，大西洋岸のニュージャージー州にある大きな農場の一つに，ある日の夕方，何千という血走ったアメリカ人どもが口々に「日本人を殺せ」と叫びながら殺到してきました。そして農場主のカワリックという男を庭に引き出して「ジャップを渡せ」と脅しました。この男は，日本人がよく働くことを知っているので日本人を使って大いに儲けようとアリゾナの日本人抑留所から五人の日本人を連れて来て牛馬のように働かせていたのです。そして日本人たちがよく働くのを見てホクソ笑んでいたのです。

ところがそれを見たアメリカ人の農民どもは日本人に対するねたみと憎しみから「日本人をわたせ，日本人を殺せ」と騒ぎ出したわけなのです。そして獣のようなアメリカ人たちは五名の日本人を半殺しにして，またもとの抑留所に引きずり込んだのであります。

司令官マックアーサーやハルゼーを始め農民に至るまで敵アメリカ人が我々日本人をどんなに見ているか彼等の腹の中をとくと見抜いてこの戦争は最後まで勝ち抜かねばなりません。

◎注意
二十八日午後九時の直前，荘重豪快な音楽を前奏のうえ放送すること。

「豆宣伝の一例」『大東亜戦争 放送指針彙報』第三十七集より

情報局は，この『豆宣伝』を国民の敵愾心をあおるうえで，「最近の最も成功した放送の一つ」であると評価している[8]。「事前の明るい放送によって国民の気持ちが明るくほぐされ，心の地盤が柔らかく地均（じならし）されていたところへ，事実を基として説き示された」ので効果があがった，というのだ。

どういうことか。放送番組を記録した「確定番組」で確認すると，この『豆宣伝』は午後7時40分から始まる『産業戦士へ送る夕』のあとに編成されていた。『産業戦士へ送る夕』では，抜群の人気を誇った廣澤虎造の浪花節「森の石松」が放送されている。音楽では「勝利の日まで」や「太平洋行進曲」なども交じるが，むしろ「勘太郎月夜唄」「故郷の歌」「坊やいだいて」など，時局とは無関係な歌が多く放送されていた。『豆宣伝』の台本は，この『産業戦士へ送る夕』のあとに，「荘重豪快な音楽を前

奏」して聴取者の気持ちを切り替えたうえで放送することを指示していた。楽しい音楽芸能番組によって明朗闊達な気持ちを醸成し，そのあとに気分一新，アメリカに対する敵愾心を振起する。この編成上の工夫を情報局は高く評価したのである。

『豆宣伝』という企画は，もともと『ラジオ太郎』という題目で1941年9月に立ち上げられたものだった。アナウンサーが“ラジオ太郎”という架空の人格を演じ，平易な語り口で時局的な宣伝を行うもので，開発にあたった企画部の小川和夫は，ただ単に「当局の希望を忠実にとりつ」ぐのではなく，自ら考え，「当局の希望するような効果を挙げる」姿勢こそが求められている，と開発の動機を語っている[9]。

そういう姿勢は読み手であるアナウンサーにも共有されていた。『豆宣伝』の原稿は主に企画部員が書いたが，アナウンサーが自ら書くこともあった。いずれの場合にも原稿を読むアナウンサーには聴取者を説得する主体性が求められた。当時を代表するアナウンサーの1人，館野守男は『豆宣伝』のような番組の意義についてこう書いている。

> 放送協会が，自己の意志を以て，国策を解説し，敷衍（ふえん）し，時局の先頭に立って国民を導いて行く自主的な宣伝機関にまで発展しなければならない。国民は放送によって時々刻々に起る重大な問題を知り得るのみでなく，放送協会自体から直接にその意義を解説され，其の問題に対して如何に処すべきかが解明される[10]。

小川にしろ館野にしろ，ラジオは軍・政府の施策・方針を機械的に媒介する装置ではなく，もっと主体的なものであるという自負を強く持っていた。彼らが情報局の指針を実行するのは，そうするしかなかったからではない。そうすることが誇りであり，自らの存在理由だった。

『豆宣伝』は，原稿の作成から朗読まで，一貫して協会職員が担う時事解説だった。時間的には「豆」であったとしても，協会自身による直接的な宣伝であるという点で，それは特別の意味を持っていた。アメリカ軍が太平洋の島々を攻略し，じりじりと日本本土に近づきつつあった1944年半ば，日本放送協会が国民に何を伝えようとしていたのか，5月28日の『豆宣伝』は如実に示している。残虐非道のアメリカに負ければどうなるかを考えよ。どんなに苦しくても，この戦争は絶対に負けるわけにはいかないのだ――。

サイパン陥落はどう伝えられたのか

先述したように，高橋映一が遺した戦時ラジオ放送のうち最も古いものは，アメリカ軍がサイパン島に上陸した5日後のニュースである。それは太平洋の戦局が「大東亜戦争始まって以来の重大な段階に立ち至っ」たことを伝えていた。大本営が戦争継続・本土防衛のために死守しなければならないとしていた絶対国防圏の一画が崩されようとしていた。

高橋映一が遺した録音盤（サイパン島陥落）

「だいぶ傷んでますけどね」

高橋が，ラベルに「サイパン島 S19.7.18 17時」と記された録音盤を手に取って言った。サイパン陥落を伝えるニュースの音源はNHKにも遺っていない。高橋はアセテート塗料が波打っている録音盤の縁を避けて慎重に針を落とした。

放送はアナウンサーの前説から始まっている。

大本営発表（1944年7月18日）

サイパン島の我が部隊は，最高指揮官南雲忠一海軍中将以下，去る7日，最後の攻撃を敢行し勇戦力闘，一昨16日までに全員壮烈な戦死を遂げたものと認められます。

サイパン島の在留邦人も終始，軍に協力し概ね将兵と運命をともにした模様であります。

大本営，きょう午後5時の発表を申し上げます。

高橋映一 録音

「玉砕」を伝えるアナウンサーの声に沈鬱な調子はない。出来事の大きさに比べ，むしろ冷静さが際立つ。

前説に続いて軍の広報官による発表。こちらは相変わらず雄渾さを前面に押し出した読み方である。

大本営発表。昭和19年7月18日17時。

1) サイパン島の我が部隊は，7月7日早暁より全力を挙げて最後の攻撃を敢行。所在の敵を蹂躙し，その一部はタポーチョ山付近まで突進し勇戦力闘，敵に多大の損害を与え，16日までに全員壮烈なる戦死を遂げたるものと認む。
同島の陸軍部隊指揮官は陸軍中将・斎藤義次，海軍部隊指揮官は海軍少将・辻村武久にして，同方面の最高指揮官，海軍中将・南雲忠一また同島に於いて戦死せり。
2) サイパン島の在留邦人は，終始軍に協力し，およそ戦い得るものは敢然戦闘に参加し，おおむね将兵と運命をともにせるものの如し。
終り。

高橋映一 録音

大本営は，軍の「玉砕」を伝えると同時に，住民が軍とともに戦い死んだことを強調していた。明日は我が身。当時17歳の高等学校生だった高橋にも事態の深刻さはわかっていた。

「サイパンが陥落すればですよ，もうアメリカの飛行機は簡単に日本まで来られるわけですから。これはいよいよ大変だと思いました。だけど，それでもまだ，最後には神風が吹くんだっていうような考えも捨てきれませんでしたね」

日本本土からおよそ2,400キロに位置するサイパン島の守備隊全滅は，人々の不安をかき立て，厭戦気分が一挙に増大しても不思議ではない出来事だった。日本放送協会はこの局面の意味をどう伝えたのだろうか。解説番組『世界の戦局』から見てみよう。

『世界の戦局』とは，当時の日本放送協会企画部長・横山重遠によれば「放送局自らが，各方面と連絡をとって，その協力の下に各種の情報を総合編集して大東亜戦争を中心とする大きな世界の動きに対してまとまった観念を国民に与えるという番組[11)]」であり，1944年1月から始まっていた。当時のラジオニュースが同盟通

信の配信記事を放送用に書き換えたものだったことは本シリーズ第1回に詳述したが，『世界の戦局』は日本放送協会職員が「各種の情報を総合編集して」つくる解説番組である。協会の主体性という点で『豆宣伝』と同じ意味を持っていた。

毎週日曜日の午後7時のニュースに続いて放送されたこの番組を実際に担当したのは報道部副部長・柳澤恭雄らだった。柳澤の戦後の著作によれば「自主取材で全体の状況を正確に知りたい」柳澤らと，「逓信省を通じての連絡にあきたらず，直接，命令したかった」軍の思惑が一致して実現したもので，当時としては「合法的な自主取材」だった[12)]。柳澤は協会職員であると同時に「軍の嘱託」という身分を兼ね，軍からもたらされる情報をもとに無署名で原稿を書き，情報局の検閲を経てアナウンサーが読んだという。原稿に軍の意向が反映されることは自明（というより前提）であり，今ならこれをもって「自主取材」とは言わないだろうが，当時の柳澤は矛盾を感じなかった。同盟通信を介さず，直接，軍の意向を国民に伝えることこそが「自主」的な報道だったのである。

前置きが長くなった。雑誌『放送』1944年9月号に『世界の戦局』が数本分まとめて採録されているが，その中に「サイパンの教訓」という副題が付された1本がある。そこでは自決を遂げたサイパン島民の死が，アメリカの週刊誌『タイム』の記事を引用して次のように描写されている。

> 遙か彼方（宮城である）を拝して水中に消えた少年，三人の愛児を抱へて投身した父，敵前岩上に緑の黒髪を梳(くしけず)って，従容(しょうよう)死に就いた婦人……。（丸括弧内は原文）

そして，非戦闘員の自決にアメリカ人がどれほどの畏怖を抱いたかを論じ，次のように結んでいる。

> 「一死奉公」という言葉は常に雑作もなく使われているが，全国民が，このサイパン非戦闘員の沈毅壮烈なる最期に倣うだけの覚悟を決めて，ほんとうの「一死奉公」に徹するならば，戦局がどれ位重大化しても，日本の前途は少しの心配もない。この覚悟，この意気こそが最大の戦力である。

『世界の戦局』が強調していたのは，日本軍守備隊の「玉砕」よりも非戦闘員であるサイパン島民の自決である。「サイパンの教訓」とは，島民の「覚悟」にほかならなかった。

『世界の戦局』だけではない。「確定番組」によれば，7月19日，すなわち大本営がサイパン陥落を発表した翌日，午後7時20分から評論家・徳富猪一郎が「重大戦局に立ちて」と題するラジオ講演を行っているが，それに続き「サイパン殉国の歌」（作詞／大木惇夫，作曲／山田耕筰）が放送されている[13)]。準備していたかのような素早さに驚くが，それはどのような歌だったのか，全5番のうち，2番から4番を示す。

> 哭け怒れ 讃えよほめよ ／ 皇軍(みいくさ)に 力協せて ／
> 同胞(はらから)は よくぞ起ちたり ／ 勇ましや
> 老いも若きも ／ 義に燃えて 国に殉じぬ

> 哭け怒れ 讃えよほめよ ／ 武器とりて 起ち得る者は ／ 武器とりて みな戦えり ／ 後(しりえ)には 大和撫子 ／ くれないに 咲きて匂いぬ

> 哭け怒れ 讃えよほめよ ／ 代々享(よよう)けし 忠武の

血もて / 旗じるし高く 揚げたり / 仰ぎ見て
同じこころに / 戦いに われら続かむ

「サイパン殉国の歌」は『国民合唱』として，毎日繰り返し放送された[14]。この歌が強調するのも，やはり島民の「殉国」だった。歌の意図するところは『世界の戦局』が説く「サイパンの教訓」と申し合わせたように重なっていた。

このような放送を聴く限り，あたかもサイパン島に暮らしていた日本人のほとんどすべてが，軍とともに戦って死に，あるいは自決したかのように思えただろう。だが，それは事実ではない。サイパン戦の前，島にはおよそ2万人の邦人（主として沖縄県人）がサトウキビの栽培をするなどして暮らしていたが，そのうち，戦闘に巻き込まれ，あるいは自決して命を失った人はおおむね半分であり，あとの半分は島を占領したアメリカ軍の施設に収容されていたのである[15]。ラジオからはそういう事実は伝わらない。軍・政府はもはや「ただならぬ戦局」を隠すことはなかったが，それは事実をそのまま伝えることを意味したのではなかった。

当時，情報局に勤務し，日本放送協会と深いつながりがあった宮本吉夫は，NHK放送文化研究所が1974年に行った聞き取り調査の中で，軍から次のような話があったことを証言している。

「あれは全部玉砕したと。文民も女もみんな玉砕したと。そういう放送でやってくれと。なぜ，そんな必要があったのか。これからこういう，日本に，この次には本土に上陸してくると。そのときにみんな，人間がすたこら逃げたら負けてしまうと[16]」

戦場となったサイパン島の住民は，これから戦場となる本土の住民の手本でなければならない。だから，全員が軍と運命をともにしたのでなければならない。それが軍の論理だった。宮本は「全部死んだなんて誰が証明できるか」と反発したとも証言しているが，情報局として軍の要請を拒否することはできなかったはずだ。

世界の戦局「サイパンの教訓」も，国民合唱「サイパン殉国の歌」も，軍・情報局の考えに沿って日本放送協会が実行したものだった。軍が負けて住民が生き残るということはあり得ない。死ぬまで戦い抜くしか道はない。それがサイパン陥落という負け戦の伝え方だった。

ダブルスタンダード

B29爆撃機はサイパン島から5時間で東京上空に達し，爆撃を終えて引き返す性能を有していた。サイパン島がアメリカ軍の手に落ちたことは，日本本土が戦略爆撃にさらされる危機が目前に迫ったことを意味していた。戦略爆撃の最終的な標的は敵国民の戦意である。

この危機に際して日本放送協会は何を訴えていたのか，『放送』1944年9月号に採録された『世界の戦局』を見てみよう。副題は「本土侵寇本格化」である。

まず言及されているのは，8月20日にアメリカ軍が行った九州北部への空爆である。中国・成都の基地を飛び立ったB29によるものだった。死傷者は約200人にのぼったが，『世界の戦局』は，日本軍制空部隊の迎撃によって「殆ど無被害で簡単に撃退し」たと伝えている。とりわけ強調されているのは犠牲的な体当たりによる敵機の撃墜だった。「壮烈鬼神を哭かしめる体当たりの敢行によって，目覚ましい戦果を挙げると共に，完全に敵胆を奪い去った」のだという。

そして，サイパンではすでにアメリカ軍が基

地建設を進めていること，B29による空襲が本格化することは避けられないことを指摘しながら，次のように結んでいた。

> 水も洩らさぬ制空陣と，一億の総力を以て不逞の侵略者を木っ端微塵に撃滅し，神州不滅の誇を断じて護らねばならぬ。然り，一億ことごとく体当たりの覚悟を以てこの不敵なる侵寇を無残に挫折せしめることこそが聖代国民の総員にかかる大責務である。

『世界の戦局』が，大規模空襲の危機が迫る中で国民に訴えていたのは，危険の喚起や具体的な防御策ではなく，日本軍の制空力の強調と空虚な精神論だった。

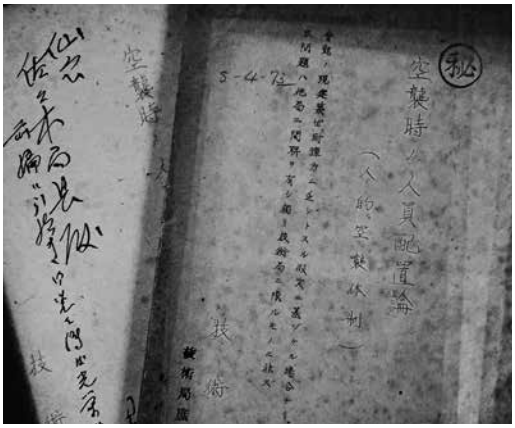
そのこと自体は，今さら驚くに値しない。軍・政府と一体となって国民を戦争に動員しようと努めてきた日本放送協会は，戦況がどんなに悪化しようが変われるはずもなかった。

だが，ここで見ておきたいのは，そういう報道姿勢は日本放送協会職員の（少なくともその大方の）事実認識とはとっくにかけ離れていたことである。

そのことを示す1つの資料がある。「空襲時ノ人員配置論」は，東京の放送会館に勤務する技術職員の空襲時における人員配置について論じた日本放送協会の内部文書で，表紙には㊙の印が押されている[17]。前編・後編合わせて72ページに及ぶこの文書には「技術局庶務課に於いて一文を草せり」と明記されてはいるが，日付もなく，どこまでオフィシャルな文書だったのかはわからない。だが，後編には前編を読んだ大阪中央放送局技術部の意見が掲載されており，また現存する冊子（後編）の表紙には「仙台 佐々木局長殿 前編に引き続き高説を仰ば光栄です」と手書きで記されていることなどから，東京のみならず，また技術部のみならず，協会内で広く読まれていたことがうかがえる。

文書は，ビルマの防空体制を報じる1943年5月16日付の新聞記事について言及している。また，「昨年四月我本土に空襲を蒙りたる……」（傍点は引用者）という記述があるが，これは1942年4月のいわゆるドゥーリットル空襲を指していると推察される。これらのことから文書が作られたのは1943年の5月から12月の間であることがわかる。アッツ島が陥落し，アメリカ軍による日本本土空襲が現実味を帯び出したころだっただろうか。「空襲必須が今日の常識」という記述もある。

空襲時ノ人員配置論



NHK放送文化研究所所蔵

さて，文書の内容を見てみよう。論者はまず，空襲による被害を次のように予想している。

「敵機による破壊の結果は，必然惨憺たる情景しか予想せざるを得ぬ。交通機関の不通，水道，瓦斯，電灯の使用停止，火災の発生，死傷者の激増，何れも明朗を欠くものばかりとなるであろう」

そして放送会館が爆撃に対して特別強固に

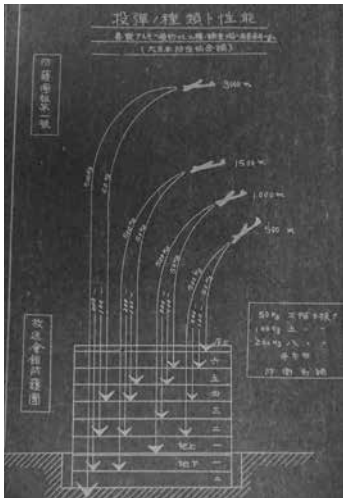
設計されているわけではなく，「優秀なる技術者」が会館に集中している現状を「恐るべき決戦型，人的冒険体制」であると批判している。さらには「一般産業陣営に働く労務者」は空襲にあえば「機械と人命は再起不能」となるとしても「良心的に恥なきはずである」が，「放送報国」を使命とし，高い専門性を有する「放送陣にはそれが許され」ない。「死を賭すことは，放送陣の命題とはならな」いのだと言う。そのうえで論者は，放送会館に勤務する技術職員を3グループに分け，空襲警報が発令されたときには，1グループを会館に残し，あとの2グループは自宅待機とすること。そして，会館の人員が失われれば，待機組を再び3グループに分け，以下，同様に繰り返す体制を作るべきだと提言している。

この文書を読んで，私はなんとも嫌な気分になった。ラジオは兵器増産を喧伝し，工場労働者を「産業戦士」と持ち上げていたはずなのに，日本放送協会の内部では，こんな文書が書かれ，読まれていた。「労務者」は空襲で死んでも仕方がない（それは恥ではなく名誉である）が，放送事業従事者はそうはいかないと言っているのだ。

もっとも論者にも人々の反発を招くであろうことはわかっていて，空襲警報発令後に技術職員の3分の2が会館を脱出し家路につけば，「死を恐れて逃げ回る卑劣なる行為」に映るかもしれないが，それでもそうするべきだと主張している。論者はあくまでも真剣である。そして，特権意識丸出しの書きぶりに嫌悪感が先に立ってしまうことは否めないにしても，「空襲時ノ人員配置論」そのものは合理的と言えば合理的なのだ。

何よりも，論者はアメリカ軍の空襲が引き起こすであろう被害の大きさを冷静に予測していた。放送会館は6階建てのビルだったが，高度3,000メートルから500キログラム爆弾を投下されれば，爆弾は屋上から地下までを貫き破壊するだろうという試算も図入りで紹介している。そして，空襲にさらされる東京で放送事業を少しでも長く継続する手段として「人員配置論」を展開しているのである。それは科学的な思考を排除し精神論ばかりを強調する「恐るべき決戦型」体制に対する，技術者らしい批判とも言えるものだった。

放送会館の空爆被害予想図



結局，論者が唱える「空襲時ノ人員配置論」が実行に移されることはなかった。「一億体当たり」の建前からも許されることではなかっただろう。だが，ここで重要なことは，1943年の後半にはすでに協会内部でこのような合理的な空襲脅威論が流通していたことである。サイパン島が陥落した1944年7月以降，空襲の脅威はより広く，より深刻に共有されていたはずだ。そうなのに，日本放送協会の放送は空襲の被害を過小評価し，聴取者には「体当たり」の精神ではね返すことを求めていた。

繰り返すが「空襲時ノ人員配置論」には一定の合理性があった。しかしそのこととは別に，多くの協会職員が空襲の脅威を深刻に受け止めている一方で，ラジオが相変わらずの精神論を振りかざし，それこそ「恐るべき決戦型，人的冒険体制」を国民に強いていたダブルスタンダードは指摘しておかなければならない。

2. 起て一億 1944年9月～1945年2月

「玉砕」は「勝利の大道」

さて，負け戦は太平洋の島々だけではなかった。1944年9月には，中国・ビルマ（現ミャンマー）国境付近の拉孟（らもう）・騰越（とうえつ）の日本軍守備隊が全滅している。両地は連合軍が中国軍へ物資を送る道（援蒋ルート）の要所であり，その道を遮断していた守備隊が全滅したことの戦局全体に及ぼすダメージは大きかった。だが『世界の戦局』は「拉孟・騰越の不滅の凱歌を顧みる」と題し，この負け戦は「玉砕，体当たりの大闘魂」によって敵に大きな損害を強いたのであり，アッツ島玉砕などの「光輝ある悲壮戦史」に連なるものだとして次のように主張していた。

> すなわち，拉孟，騰越の玉砕は，一戦局の勝敗の問題ではなく，兵力と物量消耗の比率がいよいよその開きを大にしてきたということ，そのことの将来にもたらす影響が，皇軍完勝の公算を次第に確実にしてきたという点に画期的意義がある。（中略）戦局は決して暗くなったのではなく，勝利の大道を堂々と前進しているのである[18]。

部隊の「玉砕」がなぜ勝利につながるのか，その理屈はこうだ。日本軍は全滅を覚悟して戦っているから，物量に劣っていても敵に大きな損害を与えることができる。日本軍が見せた戦いぶりは敵に大きな動揺を与えたはずであり，そのことの意味は拉孟・騰越を失ったことよりはるかに大きい――。

拉孟・騰越が，戦局に大きな影響を与えない孤立した戦場であれば，そして兵士を消耗品と考えれば，そういう理屈もあるいは成り立つのかもしれない。日本軍守備隊が全滅と引き換えに敵に少なからぬ損害を与えたことは事実だからだ。だが実際は，拉孟・騰越の喪失は局地的な敗北にとどまるものではなく，連合国軍の援蒋ルートが強化されることを意味していた。そしてそれは，日本軍がその大きな部分を中国に張りつけておかなければならず，ひいてはアメリカ軍と直接対峙する太平洋に兵力を集中することができない状況を固定化することにもつながっていた。まさに「拉孟，騰越の玉砕は，一戦局の勝敗の問題ではな」かったのである。

『世界の戦局』が「大東亜戦争を中心とする大きな世界の動き」を伝えるための番組だったのならば，本来，伝えるべきことはそういう事実だったはずなのに，実際には「玉砕」したがゆえに「勝利の大道」につながるのだと強弁するばかりだった。ラジオは，この倒錯した理屈によって国民を破滅へと導いてゆく。拉孟・騰越の「玉砕」に続けて，『世界の戦局』は次のように伝えていた。

「ニミッツとマックアーサーの分進合撃の侵攻路が比島に進んできたことはもはや否まれない。これに備へる我が陸海軍の鉄壁態勢は既に整っている」

フィリピンを失えば，日本は南方資源の輸送ルートを遮断され戦争の継続そのものが困難

になる。逆にアメリカ軍に大打撃を与えることができれば戦局は一挙に好転するはずだ。かくして，フィリピン戦が戦争の勝ち負けを決する天王山としてクローズアップされることになる。

起て一億

高橋映一が日比谷公会堂から中継された「『起て一億』の夕」を聴いたのはそんなときだった（1944年10月3日放送）。決戦国民歌と銘打たれた2曲，「決戦の秋は来れり」「起て一億」の発表イベントであり，日本文学報國会，大日本藝能会，日本音楽文化協会が主催，日本放送協会は協賛に名を連ねていた。発表された2曲の一節を示しておこう。

「決戦の秋は来れり」
すめらみ國の興廃は / けふのいくさにかかりたり / ああこのいくさ勝たずんば /祖宗の國を如何せん / 起て一億決戦の秋は来れり
作詞／三好達治，作曲／林松木

「起て一億」
松美しく砂清き三千年の神の国 / 来り侵すは何奴ぞ / 怒に燃ゆる一億が / 雄叫び高く起つは今
作詞／西條八十，作曲／山田耕筰

貴重な録音盤を節約する必要があったのだろう，高橋は中継の最後だけを録音している。アナウンサーは合唱をバックに，次のように締めくくっていた。

「『起て一億』の夕」（1944年10月3日放送）

決戦のときは来れり。起て一億。私どもはこの歌を声高らかに唱和するとともに，傷痍軍人，並びに遺家族の方々に感謝し，飛行機・食料の増産活動。不撓不屈の信念を持って，米英撃滅。勝利の日まで，勝利の日まで戦い抜く。勝ち抜くことこそ，真の決戦援護であり，皇国護持に笑って散った将兵や同胞に応える道であろうと存じます。
「起て一億」の夕べ。日比谷公会堂よりの中継を終わります。

高橋映一 録音

社会に広がり始めていた戦争の先行きへの不安を吹き払うように，ラジオは「一億」の戦いを叫んでいた。アメリカ軍がフィリピン・レイテ島に上陸したのは，この中継から17日後のことだった。

高橋映一の疑念

1994年10月20日，私はフィリピン・レイテ島東海岸の街，パロにいた。終戦50年の企画，NHKスペシャル「死者たちの声～大岡昇平・『レイテ戦記』～」の取材・撮影のためである。

この日，パロではフィリピン政府によるアメリカ軍上陸50周年のセレモニーが行われていた。セレモニーにはペリー米国防長官（当時）をはじめ，アメリカ，オーストラリアの退役軍人らが招かれており，その最大の呼び物はアメリカ軍上陸作戦の再現だった。アメリカ軍，フィリピン軍などの艦船20隻余りがレイテ湾を埋め，戦闘機が飛び交う中，マッカーサーに扮した役者を乗せた舟艇が近づいてくる。舟艇から浅瀬に飛び降りた役者がよろめき，あやうく転びそうになったとき，海岸を埋め尽くした群衆が笑い，どよめいた。

大がかりな再現だったが，そこには欠けていたものがある。海岸に折り重なっていたはずの

日本兵の死体である。陸軍第16師団の生還者を取材した大岡昇平は，艦砲射撃にさらされた海岸陣地の兵士たちの姿を『レイテ戦記』の中で次のように描写している。

> 彼等はヤシの丸太の粘土で固めた砲台が，土台ごと吹き飛ぶのを見た。ヤシの並木が根元から燃え，梢から仕掛花火のように焔を吹き上げるのを見た。隣にいた戦友が全然いなくなり，気がつくと彼自身も大腿の肉がそがれていたりした。ある者は胸に手を当てて眠るような格好で横たわっていた。頬をくだかれ，眼球が枕元に転がっている死体もあった。首がない者もいた。手のない者，足のない者，腸が溢れて出ている者，想像を絶したこわれ方，ねじれ方をした人間の肉体がそこにあった[19]。

レイテ島では8万人を超える日本軍将兵が死んでいる。それは，制海権も制空権も奪われた孤島で繰り広げられた地獄のような戦いだった。

だが，ラジオから聴取者が戦場の実相を知り得るはずはなかった。その戦いが始まって5日目と6日目，高橋映一は「大本営発表」を2日連続で録音している。「『起て一億』の夕」を聴いていた高橋も，レイテ戦を天下分け目の戦いと理解していたのだろう。

高橋映一が遺した録音盤（レイテ島）

10月25日の発表は軍の報道官によるもので，日本軍がフィリピン東方海上でアメリカ軍の機動部隊，輸送船団を猛攻，航空母艦4隻を撃沈するなどの戦果をあげたとしていた。翌26日は，「大本営発表」をアナウンサーが読み上げている。

大本営発表（1944年10月26日放送）

> （冒頭，数語欠落）その後の戦果について2つの大本営発表がありました。
> 大本営発表。昭和19年10月26日16時50分。
> 1）レイテ島の我が陸上部隊は10月20日以降，タクロバン南方，およびドラッグ付近に上陸せる約3個師団の敵を邀撃（ようげき），奮戦中なり。
> 2）我が航空部隊は10月19日以降，レイテ湾内の敵輸送船団，およびその護衛艦艇を連続攻撃中にして，我が艦隊また25日未明，同湾内に突入，これに強襲を敢行せり。（以下略）

高橋映一 録音

略した部分では，敵空母2隻撃破などの戦果が強調されている。これだけを聴けば，誰しもレイテ決戦は日本軍の優位に進んでいると思うだろう。だが，事実はまったく違うものだった。20日から25日にかけてのレイテ沖海戦で日本軍の連合艦隊は潰滅，陸上部隊は孤立し，漸次，消耗してゆくしかなかったのである。繰り返すが，ラジオは戦況の緊迫を伝えるようにはなっていたが，事実を伝えていたわけではない。

高橋は，録音機同様，やはり手作りの受信機でアメリカ軍による日本語の短波放送（VOA）を密かに聴いていた。高橋は私にこう語っている。

「日本はもう完全に負けているって放送しているんですよ。大本営発表とはまるっきり違うんです」

どちらが本当なのか，高橋にはわからなかった。日本放送協会と聴取者の間に亀裂が生じ始めていた。そしてこの時期，放送を出す側の人間たちの「放送報国」の信念も揺らぎ始めていた。

放送解説委員の苦悩

レイテの戦いが緊迫の度を増す中，日本放送協会は新たな解説番組を創設している。「戦局の動向，国際情勢，時事問題に即応し迅速，的確に之を解説放送する[20]」もので，『世界の戦局』が文字どおり戦局解説だったのに対し，より広い時事問題を扱う「放送局の社説[21]」と位置づけられていた。放送解説委員は日本放送協会によって任命されたが，人選のポイントは新しい情報を持っていることとともに，「政府の意向をはっきり承知している[22]」ことだった。放送協会の内部からは『世界の戦局』を担当していた柳澤恭雄と，和田信賢（のぶかた）アナウンサーの2人，外部からは大政翼賛会戦時生活部長・頼母木（たのもぎ）眞六ら5人が選ばれている。

最初の打ち合わせ会議は，10月31日，情報局の総裁応接室で行われた。陸海軍の報道部員，情報局戦時資料室第一課長（国内情勢），同第二課長（国際情勢）らが参集し，7人の放送解説委員を前に所管事項をレクチャーしている[23]。会議の開催を報告する資料には打ち合わせの内容は記されていないが，レイテ戦の現状とそれをどう国民に伝えるかが軍・情報局から放送解説委員たちに伝えられたはずだ。このとき，レイテ島の守備についていた第16師団は，すでに崩壊の危機に瀕しており，悪化する戦局を「的確に」解説することが急がれていた。「放送局の社説」とはどんなものだったのだろうか。

1944年12月2日，夜7時のニュースに続いて柳沢恭雄による「レイテに注げ 我が補給力」が放送された。その内容は雑誌『放送』1944年12月号に「太平洋の補給作戦」のタイトルで掲載されている。柳澤は小磯國昭首相の「フィリピンの決戦は天王山の戦いである」という言葉を引用しながら，次のように訴えていた。

> 生産と補給隘路を克服して，決戦に打ち勝つ為には一億の体当たりが必要である。それもいま必要である。決定的戦場・天王山に，決定的兵器・飛行機を，決定的瞬間・たったいま送り届けることが，一億の御楯の神聖な務めである。

だが，国内の航空機生産能力はとっくに限界に達していたし，制海権・制空権がアメリカ軍の手にある中で兵器・兵員の輸送は困難を極めた。柳澤自身そのことは誰よりもわかっていたのであり，戦後，こう回想している。

> 私の解説は無責任な訴えであった。補給強化が不可能だと知りながら書いた解説の内容と私の心の中との矛盾に苦しんだ。そのあと私は解説を書くこともマイクに向うこともなかった[24]。

ラジオはもはや，それを聴く人を欺くだけではなく，放送を出す側にある者も自身の心を欺

かなくては成り立たないものになっていた。

特攻隊はどう伝えられたのか

補給を絶たれた絶望的な決戦場・フィリピンでは，日本軍機によるアメリカ軍艦船に対する組織的な体当たり攻撃，特攻作戦が生まれている。海軍省が神風特別攻撃隊の「殊勲」を初めて公表したのが10月28日。ラジオはその翌日の夜には『愛国詩』で西條八十の「神風特別攻撃隊」を，『軍国歌謡』では「嗚呼神風特別攻撃隊」を放送している。それはこんな歌だった。

> 送るも征くも今生（こんじょう）の / 別れと知れど ほほえみて / 爆音高く 基地をける / ああ神鷲の肉弾行
>
> 作詞／野村俊夫，作曲／古関裕而

恒常化してゆく特攻作戦を日本放送協会は積極的に伝えた。「確定番組」で確認できる1944年中に放送された特攻隊関連の番組を示しておく（**表2**）。

当時，日本放送協会国内局長・矢部謙次郎は特攻隊について次のように述べていた。

> 今は徒に特別攻撃隊の偉勲を賛美するに止まることは許されぬ。必死を期して体当り行く勇士の姿を拝みつつ，我等国内に在る者，ただ断腸の思いを以て自らの過去の働きを省み，今こそ特別攻撃隊につづかんことを期するのみである。（中略）レイテの敵を殲滅して，英魂を安んずるの道はこれ以外にない[25]。

表2　特攻隊関連番組（1944年放送）

1944年11月16日	「特別攻撃隊将兵の御霊に合掌す」 斎藤瀏
12月4日	講談「嗚呼 忠烈万朶隊」
12月5日	「神風に続くもの」 ～三重航空隊高野山分遣隊にて～
12月8日	「出撃前夜の薫空挺隊」 ～比島前線基地にて録音～
12月9日	「レイテを勝ち抜くもの」 大本営陸軍報道部長 松村秀逸
12月11日	「物語り 万朶隊進撃」
12月13日	「空の神兵に訊く」 ～前線基地にて～
12月17日	陸軍特別攻撃隊（録音） 「護国隊」―某基地にて―

『20世紀放送史』（上）およびAK「確定番組」より作成

日本放送協会にとって，特攻作戦は国内世論の引き締めに格好の素材だった。放送現場はどのように伝えようとしたのか，表2の最後にある1944年12月17日放送の『陸軍特別攻撃隊（録音）「護国隊」―某基地にて―』について見てみよう。出撃前の隊員たちの肉声を録音で伝えたもので，当時，大きな反響を呼んだ番組だった。その内容は放送当日の朝日新聞で知ることができる。番組を予告したうえで，事前に聴いた録音を紙面に掲載しているからだ。

新聞によれば録音は放送用であるとともに，遺家族に提供されることにもなっていた。出撃してゆく7人の隊員たちは，みな，両親への感謝，兄弟姉妹への別れの挨拶，そして最後の覚悟を語っていた。

> 本当にお世話になりました，喜んで征きます，郷党の皆様やります……，最後に私の心は任務のことで一杯であります，本当に……本当に……喜んで，喜んでおります。
>
> 笑って下さい，もう何も言うことはない，今なにか言えといわれて困っているんです，とにかくやりましょう。さようなら，お元気で……。

俺は元気で征く，出陣に際して一首，
「米英の戎（えびす）等いかに驕るとも何ぞ敵なる八紘一宇に」
では皆々様皇国のために御健闘あらんことを。
（朝日新聞1944年12月17日朝刊より）

1つの疑問がある。彼らがレイテ島西岸アルブエラ付近のアメリカ軍艦隊に突撃したのは12月7日のことであり，大本営は9日にその戦果を発表している。だが，この隊員たちの声を伝える録音番組が放送されたのは12月17日の夜だった。ラジオから聞こえてくるのは，10日前に死んだ男たちの声だった。なぜ，そんなに時間がかかったのだろうか。先述したように「サイパン殉国の歌」は，サイパン島陥落を伝える大本営発表があった翌日には放送されている。愛国詩「神風特別攻撃隊」，軍国歌謡「嗚呼神風特別攻撃隊」もまたしかり，初の特攻作戦の発表翌日には放送されている。それを考えればあまりに遅すぎる。大本営発表からでも1週間も過ぎているのだ。

録音はフィリピン現地で行われたのではなく，隊員たちがフィリピンに向けて出発するときに内地の基地で行われたものだったことは新聞が報じている[26]。特攻出撃までに放送を準備する時間は十分にあった。録音盤の輸送に時間を要したわけでもない。9日の大本営発表によって特攻の実行が確認できればすぐにでも放送できたはずなのだ。

ではなぜ，そうしなかったのか。推論になるが，放送には出せない部分を編集で削ぎ落とすために時間を要したのではなかったか。すぐに放送したくてもできなかったのである。

ここで，昭和の名優・森繁久彌の印象的な体験を，その著書『こじき袋』から引用したい。森繁は，戦時中，満州国に作られた新京放送局のアナウンサーだったが，ある日，関東軍司令部の参謀から呼び出された。関東軍の飛行隊から選抜された者が特攻隊員として沖縄に向かうことになったから，彼らの遺言を父母兄弟のために録音してほしいという依頼だった。森繁は録音技師とともに，1日に10人ずつ，全部でおよそ60人の特攻隊員に向き合うことになった。「こんなことがあっていいのか」と涙を流しながらの仕事だったという[27]。たいていの隊員は「勇壮な気持ちを端的に述べて」部屋を出てゆくのだが，そうではない若者もいた。森繁は「おそらく永久に忘れることができないほど強い印象」を受けた1人の青年について書いている。

その青年はなかなか話し始めようとしなかった。森繁は「私がいないほうがよければ……」と退室しようとするのだが，青年はいてもかまわないと言う。そしてポツリ，ポツリと話し始めた。

「お父さん……いま僕は，なぜだか，お父さんと一緒にドジョウをとりにいったときの思い出だけで頭がいっぱいなんです。……何年生だったかな……小学校六年のときだったと思うけど……」

青年は，それが休みの日だったこと，家の近所を流れる川でのことだったこと，弟も一緒だったこと，弟が白い帽子を，父がカンカン帽をかぶっていたこと，弟がすべって川に落ちたことなどを話し続けた。

「二〇年も生きてきて，いま最後にお父さんにお話をするんだというのに，こんな，ドジョウのことしか頭に浮かんでこないなんて……」

そう言ったまま話が途切れると，青年はうつむき，しばらく沈黙が続いた。そして青年はまた話し始めた。

お父さん！……ほんというと，出発するのが嫌なんです。でも，そういっても，もう日がせまっていて，征かなければならない。正直言って僕は怖い。僕は卑怯かも知れません……ね……お父さんだけに僕の気持ちを解ってもらいたいん……だ……。

森繁は「何の虚飾もない彼の言葉に一番人間らしい真実さを感じて心をうたれ」たと記している。こういう「真実さ」が，12月7日にアメリカ軍艦隊に突入していった「護国隊」の隊員たちの声の中にも（森繁が記した青年ほどではないにしろ）微妙に交じり込んでいたとしても不思議ではない。録音は放送だけを目的としていたのではなく，遺家族に渡すためでもあったのだ。だがそういう声は慎重に削ぎ落とさなければならなかったはずだ。彼らの声には一片の迷いもあってはならなかった。特攻隊員は天皇・国家のために喜んで命を投げ出すのであり，だからこそ銃後国民の模範なのだ。

特攻作戦をどう受け止めるのか。放送現場には名状しがたい緊張感が漂っていた。大阪で教養番組を担当していた大原知巳（2009年当時93歳）は私に次のように語っている。

「『ラジオ歌壇』っていう番組があったんです。聴取者から歌を募集して，一流の先生が選んで放送するんですがね，そういう中に特攻関係のものがありました。覚えてはいませんが，もちろん特攻隊を賛美する歌でした。でも正直，私は割り切っていましたね」

大原は，当時を知らない私に，挑むような眼差しを向けて続けた。

「戦争を始めた以上，行くところまで行くんです。特攻隊はね，誠に悲惨だけれども，もう行くところまで行かなきゃ戦争は収まらんだろうって，そういう気分になってましたね。

あきらめとも違うんですが来るものが来たな，ここまで追い詰められたんだなっていう気持ちです」

大原はそれ以上は語らなかった。

大衆とラジオの乖離

高橋映一は1945年元日，朝7時のニュースを録音している。アナウンサーの声はくぐもり，ところどころしか聞き取れない。録音装置を調整するゆとりもなかったのかもしれない。前年11月末に始まったB29による東京空襲は日増しに激しさを増していた。

ニュース（1945年1月1日放送）

（冒頭，数語欠落）ここに大東亜戦争下，4たび迎えるこの日，紀元2605年の元旦を迎えました。天地（あめつち）とともに弥栄（いやさか）えます●●●●（数語，聞き取り不能）民草一億が奉公の●●●●を奉る昭和20年の元旦にあたり，畏（かしこ）くも天皇陛下におかせられましては，宮中において●●●●新年の●●●●を執り行わせられ●●●●民草の不屈を御祈念あらせられ，ひらけゆく●●●●

高橋映一 録音

高橋が録音したのは太平洋戦争の開戦以来，毎年元旦に繰り返されてきたはずの型どおりのニュースにすぎなかった。わずか40秒。「ひらけゆく」の次に聞き取り不能の数語があり，そこで録音は唐突に終わっている。空襲下の東京に「ひらけゆく」ものなどあるはずもなかった。

同じ日，1945年1月1日夜7時20分から小磯國昭首相はラジオで「年頭の辞」を放送，

「戦勝の神機は正に目の前にある」としながらも，「天王山」であったはずのレイテでは決着がつかなかったことを暗に認め，「今や比島全域が天王山である」と述べていた[28]。2か月ほど前には自身が同じラジオで「レイテ戦はまさに天王山であり，天下分け目の決戦である」と国民に訴えていたのだが[29]，そのレイテはすでに失われ，主戦場はルソン島に移ろうとしていた。小磯は自伝の中でこう回想している。

> 筆者は全国放送で天王山の戦さは今やレイテから呂宋（ルソン）島に移動したと苦しい言い訳をせざるを得なかった。之を聴いた同胞の一部には「天王山が移動したそうだ」と嘲笑する向きもあったが，至極，尤もであると言わざるを得ない[30]。

総理大臣の耳にも，自身のラジオ講演を嘲笑する人々の声が聞こえていた。ラジオに対する不信感の高まりは，1月23日の朝日新聞朝刊の特集記事「ラジオはもっと面白くならぬか」からも読み取ることができる。そこには聴取者の次のような声が寄せられていた。

> お役所の臭いのぷんぷんするのがたまらぬ。何かに掣肘されているのではないか。
>
> 一番ひどいのは講演だ。どれをきいても同じだ。またはじまったかとうんざりする。
>
> 真の建設は正しい批判から出発する，そうした批判性の欠乏は世間全般の流れだが，特にラジオにはなはだしい，ラジオの報道だけをきいておれば戦争はとっくに日本が勝っていなければならぬことになるではないか。

軍・政府からの情報を垂れ流すだけのラジオは，すでに大衆から見放され始めていた。

それでもなお，ラジオは国民を本土決戦へと導こうとしてゆく。

3. 本土決戦へ 1945年3月～1945年6月

硫黄島玉砕

1945年3月10日，東京はアメリカ軍の戦略爆撃にさらされ，10万人が死んだ。その2日後の浅草の惨状を，作家・高見順は日記にこう記している。

> 震災でも残った観音さまが，今度は焼けた。今度も大丈夫だろうと避難した人々が，本堂の焼失とともに随分沢山焼け死んだという。その死体らしいのが，裏手にごろごろと積み上げてあった。子供のと思える小さな，――小さいながら，すっかり大きくふくれ上がった赤むくれの死体を見たときは，胸が苦しくなった[31]。

東京の下町を焼き尽くしたのは，サイパン，グアム，テニアンの各基地を飛び立ち，硫黄島上空を経て東京に到達した，300機を超すB29の大編隊だった。硫黄島がアメリカ軍の手に渡れば，東京空襲はさらに容易になるはずだった。その硫黄島の日本軍守備隊の全滅を高見がラジオで知ったのは3月21日の午後3時，郷里に疎開させる荷物をトランクに詰めているときのことだった。

> 硫黄島玉砕の発表。栗林司令官の電文をアナウンサーが涙でぬれた声で伝えた。胸がこみあげてきた。硫黄島で怨みをのんで死んだ

人々のことを考えると，安閑として生きていることが，何か申しわけない気がした[32]。

硫黄島守備隊の全滅を伝える大本営発表と，指揮官（陸軍中将）・栗林忠道の決別電報を高橋映一が録音している。やや長くなるが，唯一無二の貴重な音声資料なので全部を引用する。

大本営発表（1945年3月21日放送）

1）硫黄島の我が部隊は敵上陸以来約1か月にわたり敢闘を継続し，殊に3月13日頃以降，北部落および東山付近の複郭陣地により，凄絶なる奮戦を続行中なりしが，戦局遂に最後の関頭に直面し，「17日夜半を期し，最高指揮官を陣頭に皇国の必勝と安泰とを祈念しつつ，全員壮烈なる総攻撃を敢行す」との打電あり。爾後，通信，絶ゆ。
2）敵兵同島上陸以来3月16日までに陸上においてこれに与えたる損害，約3万3千名なり。

繰り返します。

高橋映一 録音

繰り返しを避けようとしたのだろう，ここで，録音は1度終わっている。そのあと，栗林の決別電報の朗読が始まると，高橋は急いで録音盤に針を落としているのだが，少し遅れた。新聞報道と照合すると，最初の2文と次の文の1語目が欠落していることがわかる。最初の2文は「戦局遂に最後の関頭に直面せり。17日夜半を期し小官自ら陣頭に立ち，皇国の必勝と安泰とを祈念しつつ全員壮烈なる総攻撃を敢行す」であり，次の文の冒頭の1語は「敵」である。

栗林の決別電報（1945年3月21日放送）

（敵）来攻以来想像に余る物量的優勢を以て陸海空よりする敵の攻撃に対しよく健闘を続けたるは小職のいささか自ら悦びとする所にして部下将兵の勇戦は真に鬼神をも哭かしむるものあり。

然れども執拗なる敵の猛攻に将兵相次いで斃れ，為に御期待に反し，この要地を敵手に委ねるのやむなきに至れるは誠に恐懼に堪えず，幾重にもお詫び申し上げる。

特に本島を奪還せざる限り皇土永遠に安からざるを思い，たとえ魂魄となるも誓って皇軍の捲土重来の魁となることを期す。今や弾丸尽き水涸れ戦い残れる者全員いよいよ最後の敢闘を行わんとするにあり。つらつら皇恩のかたじけなさを思い粉骨砕身また悔ゆる所にあらず。

ここに将兵一同と共に謹んで聖寿の万歳を奉唱しつつ永えにお別れ申し上げる。終わりに左記駄作，御笑覧に供す。

国の為重きつとめを果し得で矢弾尽き果て散るぞ口惜し

仇討たで野辺には朽ちじ吾は又 七度生まれて矛を執らむぞ

醜草の島に蔓るその時の 皇国の行手一途に思う

栗林中将

栗林最高指揮官の最後の電文であります。

高橋映一 録音

このあと，吹奏楽による「海ゆかば」が続き録音は終わっている。

硫黄島守備隊玉砕を大本営が発表したのは3月21日の正午である。この発表は正午の

ニュース枠の中で放送されたはずだが，高見順の日記には「三時の報道」と記されている。「確定番組」で確認すると，正午の報道の次の報道が午後3時であることから，高見が聴いたのは2度目の放送だったと思われる。

一方，高橋が録音したニュースが正午の放送だったのか，午後3時の放送だったのか，あるいはそのどちらでもなく，その日の夜に繰り返されたものだったのか，確認する術はない。だから，高橋が録音した放送と高見が聴いた放送が同一のものとは言いきれないのだが，それを承知のうえで言えば，高橋の録音を聴く限りアナウンサーの声は高見が記すように「涙にぬれ」てなどいない。むしろ，荘厳さを意識したような朗読である。アナウンサーが別だったからなのだろうか，それとも同じアナウンサーでも2度目の放送では，思わず感情が表に出てしまったのだろうか。そうだとすれば，それはどんな感情だったのだろうか。

私の考えを述べる前に，作家・梯久美子が明らかにした，栗林の決別電報の大本営による改変について触れておかなければならない。放送された栗林の決別電報は，3月22日の各新聞に掲載されたものとほとんど同一である。差異といえば新聞では「申上ぐ」となっているところが放送では「申し上げる」となっていたり，「魁たらんことを期す」が「魁となることを期す」となっている程度だ。大本営が発表した決別電報を新聞はそのままに書き，ラジオは一部を話し言葉に直して放送していた。だがそのどちらも，栗林の電報を大本営が改変したものだったのである。

電報はどう改変されたのか，梯は防衛庁防衛研修所戦史室による公刊戦史『戦史叢書』に掲載されている栗林の電報ならびに遺族が保管する電報オリジナルと，新聞に掲載されたそれを比較して明らかにしている。例えば新聞では（つまりはラジオでは）「克く健闘を続けた」となっている部分は，本来の電文では「宛然（えんぜん）徒手空拳を以て克く健闘を続けた」となっていた。この削除について梯は，「『徒手空拳』を訴えるなどは泣き言であり，軍人たるもの，どんなに苦しくとも文句を言わず耐えて戦い，黙って死んでいくべきである――そんな当時の“常識”が透けて見えてくる[33]」と記している。

それだけではない。改変は栗林の辞世の歌にまで及んでいた。第1首の最後は新聞とラジオでは「散るぞ口惜し」になっているが，本来は「散るぞ悲しき」だったのである[34]。敵弾を浴びて死ぬことは「口惜し」くとも「悲し」くはない。なぜなら死ぬのは天皇のため，国家のためだからである。それが栗林の決別電報を受け取った大本営の思想だった。

硫黄島は「玉砕」を宿命づけられた戦場だった。アメリカ軍が上陸（1945年2月19日）する2週間ほど前，2月6日にはすでに大本営は「結局は敵手に委ねるもやむなし」としていた[35]。栗林にとって硫黄島を死守しようとする意味は，アメリカ軍が空と海から日本本土に接近するときをできるだけ遅らせることだった。だからこそ，栗林は上陸してくる敵を水際でたたくのではなく（それでは結局，物量に優る敵に短期間で殲滅されてしまう），地下陣地にこもって迎え撃つゲリラ戦を選んだ。壕を出て敵陣を襲撃してはまた壕に帰る，その繰り返しだった。兵士たちは食料はおろか飲み水もないまま戦い続けた。「玉砕」を覚悟して総攻撃を仕かければひとおもいに死ねるが，栗林はそれを許さなかった。兵士たちは可能な限り生き続け，1人でも多くの敵兵を殺すことを厳命されていた。

それはまさに地獄さながらの戦いだった。アメリカ軍は，壕の入り口に火炎放射器を放った。ガソリンを混ぜた海水を注入し，壕の内部を火の海にする作戦もあった。壕の中は死体と負傷者で埋もれてゆく。栗林の決別電報は，そういう戦いの末に発せられたものだった。散るぞ悲しき。梯は「死んでいった，あるいはこれから死んでいこうとする兵士たちへの鎮魂の賦(ふ)だった[36]」と記している。

だが，大本営が改変し，新聞とラジオが伝えた決別電報は，死を覚悟した軍人の気高さを強調するものだった。「散る」ことは「悲しき」ことであってはならなかった。フィリピンで死んだ特攻隊員と同様に，来るべき本土決戦の手本でなければならなかった。

さて，もう一度言うが，高橋映一が遺した録音を繰り返し聴いても，アナウンサーの声は高見順が日記に記したように「涙でぬれ」てなどいない。荘厳さを前面に押し出した読み方は，大本営による決別電報改変の意図を正確に理解したものに聞こえる。もし，この放送が高見の耳に「涙でぬれ」ているように聞こえたのなら，むしろそれは荘厳な「玉砕」に共振する高見の内面の声だったろう。

では，高見が聴いたニュースが高橋が録音したそれとは違うもので，アナウンサーが実際に「涙でぬれた声」で読んでいたのだとしたらどうだろう。私の考えでは，その場合でも大本営による改変の意図が損なわれることはなかった。本シリーズ第6回で述べたように，当時のアナウンス理論は「雄叫び調」と呼ばれるもので，その真髄は例えば次のように表現されていた。

> アナウンサーが「宣伝者」として生まれ変わることが要求された。宣伝者たるには，第一に情熱の人でなければならない。（中略）強調によって聴取者に訴え，情熱によって国民を捉え，其の感情を結集し，組織し，之を一定の方向へ動員しなければならないのである[37]。

アナウンサーは国策の「宣伝者」なのであり，「情熱」を込めたアナウンスで国民を「一定の方向」，つまりは戦争協力へと誘導しなければならない。硫黄島守備隊の「玉砕」という重大ニュースを伝えるとき，アナウンサーがこのようなアナウンス理論を意識しなかったはずはない。高見順に「涙でぬれた声」に聞こえたとすれば，それは「悲し」さゆえの涙ではなく，「口惜し」さゆえの涙でなければならなかった。そしてその声に込められたメッセージは高見に正確に伝わった。だからこそ「硫黄島で怨みをのんで死んだ人々のことを考えると，安閑として生きていることが，何か申しわけない気がした」のである。

栗林ら残存兵およそ500人は決別電報（3月16日付）を打ったのち，最後の突撃の機会をうかがっていた。死を目前にした彼らのもとに，ラジオが硫黄島守備隊を励ます歌を全国放送するという電報が入った。前線将兵のために行う，いわゆる「激励放送[38]」である。

だがそれは激励にはならなかった。小笠原戦友会編『小笠原兵団の最後』は次のように記している。

> NHKの全国放送で「硫黄島の歌」をやるという東京からの電報は司令部壕内の生存者を極めて憤激させた由。「内地の野郎どもこれで俺らを見捨てたのだ」。「危険な転進をやるのに歌どころでない」，「俺らを見殺しにして最後は歌か」といった怨嗟の声が充満したという[39]。

彼らが司令部壕を出たあと，動けない重症者は軍医の注射で「処置」された。手榴弾で自決する者も多かった[40]。そういう無名の兵士たちの「悲しき」心は，ラジオが国民に決して伝えてはならないことだった。

栗林らが突撃を決行したのは3月26日のことである。このとき，次の決戦場となる沖縄の海はすでにアメリカ軍の艦隊で埋め尽くされていた。県民の4人に1人が死んだ沖縄戦が始まろうとしていた。

沖縄特攻

高橋映一が遺した戦時ラジオ放送の中で最も長いものは，特攻機が沖縄を目指して出撃してゆく航空基地からの録音リポートである。自分とさして歳も違わない青年たちが死を前提に出撃してゆく様子に，高橋は複雑な思いで聴き入ったことだろう。録音は約5分間，貴重な録音盤1枚を丸々費やしている。

録音リポート（1945年6月6日放送）

> 5月〇日（〇はマルと読まれている：引用者），暁をついての第〇次総攻撃。出撃の模様であります。出撃実況，シマノ報道班員。
>
> 決戦場・沖縄の戦いは青葉若葉の今日このごろ，ますます激しく，戦局また●（一語聞き取り不能）とします。その前線に陸軍航空基地，昨日も今日も戦いの息吹を一杯にたぎらせて，再び還らざる特別攻撃隊，また翼を連ね，敵会戦を求めて飛び立ってゆきます。

高橋映一 録音

出撃前の最後の調整なのだろう，実況するアナウンサーの背後で絶えずエンジン音が響いている。実況によれば「規模壮大」な「大攻勢作戦」だった。場所は伏せられているが，このような出撃が行われた「陸軍航空基地」とは，鹿児島の知覧か万世（ばんせい）のいずれかだったはずだ。基地上空を警戒飛行する直掩（ちょくえん）機だろうか，ときどき爆音が近づくと，リポートは中断される。現場の臨場感を生かしながら，アナウンサーは特攻作戦が沖縄で大きな戦果をあげていること，しかし敵もまた必死であることを伝える。

回転する録音盤を見つめる高橋の顔が紅潮している。録音は次のくだりで終わっている。

> まだ明けやらぬ付近一帯，あたりの山は黒々と眠り，遠く飛行場の端まで並べられました誘導機をはじめ，特別攻撃機，直掩機，隼，飛燕，疾風，それに陸軍新鋭〇〇戦闘機。それらを囲んで機づきの整備兵が小さくアリのように見えます。
>
> 飛行機は戦場沖縄までわずかにひと飛び。彼我入り乱れての航空作戦……

高橋映一 録音

「特攻機はですね，モールス信号を出していたらしいんですね」。録音盤から針を上げながら高橋が言った。「それで音がなくなったときが本当にぶつかったとき……」。

震える声でそこまで言うのがやっとだった。高橋は目に涙をためたまま録音盤を丁寧にケースに納めた。

高橋映一が遺した録音盤（沖縄特攻）

日本放送協会はフィリピンにおける特攻作戦と同様に，沖縄での特攻をニュースや番組で積極的に伝えた。その中から特攻基地を取材したものを「確定番組」に探すと**表3**のような番組が見つかる。

表3　特攻基地取材番組

1945年4月21日	「特別攻撃隊出撃」 — 前線某航空基地にて —
5月25日	「海軍航空基地派遣録音隊第一報」 — 敵艦上機来襲 —
5月27日	「海軍航空基地派遣録音隊第二報」 — 我敵空母に必中突入す —
6月4日	少国民の時間 「特攻隊の基地を訪ねて」
6月6日	「陸軍前線基地録音隊記録」 — 出撃 —
6月10日	「ある日の基地」 — 海軍前線航空基地にて —
6月13日	「神風神雷特攻隊総攻撃」 — 前線海軍航空基地にて —
6月19日	少国民の時間 「振武隊の基地を訪ねて」
6月19日	「学鷲特攻隊員座談会」 — 海軍前線基地にて —
6月26日	「人に非ず弾に非ず神雷なり」 — 前線海軍航空基地にて —

AK・BK「確定番組」より作成

高橋の録音には日付のメモはないが，実況アナウンスに「陸軍航空基地」とあることから6月6日の番組だったと推察される。「確定番組」には，「手記朗読　玉田報道班員」「攻撃実況解説　島野報道班員」とある。前説アナウンスにある「シマノ報道班員」は，島野報道班員だった。

「確定番組」からは，この番組が特攻隊員の手記を朗読し，そのあとに当の隊員たちが出撃してゆくさまを伝えるという構成だったことがわかる。あるいは，出撃リポートの中に隊員の手記を織り交ぜて伝えたのかもしれない。いずれにしろ，銃後国民に「特攻隊に続け」というメッセージを伝えるための最大効果をねらった録音番組だった。

だが，この番組を聴いていた高橋映一には決して知り得ないことがあった。戦後，NHK芸能局長，営業局長，専務理事を歴任，会長候補に目されたこともあった長澤泰治（1915～2012）が，沖縄の特攻について，その取材体験を著書に書き残している。

著書によれば，長澤が鹿児島県知覧の特攻基地の取材に赴いたのは「昭和二十（一九四五）年春」のことだった[41]。高橋映一が録音した出撃は「5月〇日」。春というには遅すぎるから長澤が取材した出撃は，もう少し早いものだったのだろう。いずれにしろ，状況は同じだったはずである。

長澤は，明日出撃という兵士たちの部屋をそっとのぞいた。兵士たちはベッドに横たわってはいるが，眠っている者は一人もいなかった。翌日の出撃の様子を長澤は次のように記している。

> 司令官をはじめ隊長が見守る中を，一機また一機と飛び立っていく。九二四メートルの秀麗な開聞岳が姿を見せる。皆この山に敬礼をして飛び立っていくのだそうだ。中には，心の中の名状しがたい興奮のもって行き所がなく，滑走路を走り出してから，離陸できずに，爆破したものもいた。出撃の前の数日は，ひと時でもそのことを忘れたいのだろう。明日になれば二度と生きて帰ってこられないのだから。そう思うだけで可哀想だった。場末の飲み屋で深酒をあおって最後は前後不覚になり，口論や喧嘩が絶えなかった。これは軍の機密だったが知る人は知っていた[42]。

そういえば，森繁久彌が忘れることができ

ない強い印象を受けたと言う特攻兵士も沖縄の海に向かう運命にあった。青年は，ドジョウ捕りの思い出を胸に飛び立っていったのだろうか。

沖縄地上戦をどう伝えたのか

ところで，高橋映一が録音した部分を聴く限り，録音リポートには戦場となった沖縄についての言及はない。住民の4人に1人が死んだ沖縄の地上戦を，ラジオはどう伝え，聴取者に何をメッセージしようとしていたのだろうか。

沖縄の歴史研究者・伊佐眞一は，沖縄戦を本土の新聞・雑誌・ラジオがどう報じていたかを著書『伊波普猷批判序説』の中で検証している[43]。伊佐が洗い出したこの時期の沖縄関連番組を，「確定番組」で補足のうえ，**表4**に示す。

表にあるように4月13日には沖縄出身の毎日新聞記者・宮良高夫の筆による「激戦の沖縄を思う」の朗読が放送されている。伊佐眞一は，4月12日の朝刊に宮良の同タイトルの署名記事が載っていることを指摘しているが，13日の放送は，この記事を朗読したものだったろう。

宮良は，自分の故郷・石垣島にはイギリスの艦隊が迫っているが，そこには年老いた両親と病に伏せる兄がいること，主戦場となった本島にも数多くの親しい人々がいることを明かしてこう訴えていた。

「思っても見よ，沖縄は神聖なる皇土である，一都二府四十三県の一つ，地理的には離れていても精神的には内地である[44]」

そして，沖縄では宮良の家族，知人を含めて「軍も官も民もな」く戦っているのであり，女性も斬り込みに参加していると語っている。最後はこう結ばれていた。

表4　沖縄関連番組（1945年4月～5月）

1945年4月10日	**特集「戦う沖縄島に送る」** 吹奏楽「大東亜決戦」ほか 「挨拶」陸軍大将 南次郎 浪花節「荒神山」ほか
4月13日	**朗読「激戦の沖縄を思う」**（宮良高夫記）
4月23日	**特集「決戦場沖縄を思う」** 「話」貴族院議員 伊江朝助 沖縄の歌 沖縄民謡 朗読「決戦の沖縄へ」喜久川茂子作
4月26日	**特集「戦う南西諸島に送る」** 「挨拶」内閣総理大臣 鈴木貫太郎 軍歌と吹奏楽「総力戦」「我等の軍隊」ほか
4月27日	**講演「沖縄の戦いに勝つ手」** 情報局総裁 下村宏
5月3日	**特集「戦う南西諸島に送る」** 「挨拶」農商務大臣 石黒忠篤 合唱「必勝歌」「陸軍」ほか
5月5日	**講演「沖縄決戦の現状」**佐々木盛雄
5月12日	**物語「沖縄の古いお話（一）」** 「舟を創った兄弟」東恩納寛惇 作
5月13日	**物語「沖縄の古いお話（二）」** 「グスクの護り」東恩納寛惇 作
5月21日	**講演「沖縄の決戦」**篠原滋
5月24日	**沖縄民謡集**
5月25日	**講演「沖縄の同胞を思う」** 衆議院議員 漢那憲和

伊佐眞一『伊波普猷批判序説』および「確定番組」より作成

「沖縄を見殺してはならぬ，（中略）故郷の兄弟たちよ，安心して戦ってくれ，必ず醜敵は一億の戦友が殲滅しつくして見せる」

5月25日には，海軍少将であり，沖縄選出の衆議院議員でもあった漢那憲和が「沖縄の同胞を思う」の題目で講演しているが，これは5月14日の読売報知に掲載された漢那の談話「沖縄県民は憤う」と内容において重なるものだったろう。そこで漢那は「決戦場が沖縄であることにいまなお安易を感じ，気休めを求める人がありはしないだろうか」と危惧を表明し，

沖縄では「女子供まで戦っている」のに，「よその火事場見物みたいな人たちが若しこの東京に一人でもあったとしたら，沖縄戦局は決して有利になろう筈がない」と訴えていた。

ラジオ放送に動員された沖縄出身者たちの声は，ねじれた形ではあるにせよ，在日米軍基地の7割が沖縄に集中している現実を前にした私たちの胸に，時代を越えて突き刺さる。沖縄住民の苦難を人ごとにするな，軍と運命をともにしようとしている沖縄住民に続け，それが彼らが発するメッセージだった。サイパンで「殉死」した住民の多くは沖縄出身者だったが，沖縄の住民は再び，内地住民の「手本」とされたのである。

激励放送

ところで表4に示した番組のうち，4月10日の「戦う沖縄島に送る」，4月26日，5月3日の「戦う南西諸島に送る」という3本の特集番組は，あたかも沖縄で戦う日本軍将兵，住民に向けたかのようなタイトルである。最後の突撃を前にした硫黄島の兵士たちを憤慨させた「激励放送」だった。

4月26日の「戦う南西諸島に送る」では，鈴木貫太郎首相の「挨拶」が放送されているが，その内容は翌27日の朝日新聞に掲載されている。鈴木は，「沖縄全域に一致団結して全員必死特攻敢闘せらるる将兵各位並びに官民諸君」と呼びかけたうえで，「私ども本土にある国民もまた時来らば一人残らず特攻隊員となり，（中略）終局の勝利を得んことを固く決意している」と語っていた。

このような「激励放送」を日本放送協会沖縄放送局長・岩﨑命吉が洞窟に身を潜めながら聴いていた。沖縄放送局は，アメリカ軍の本島上陸（4月1日）を目前にした3月23日，空爆によって放送機能を失い，岩﨑は技術職員10人とともに日本軍通信部隊の嘱託となり，軍と行動をともにしていた。洞窟の中には通信兵用の電池式受信機が設備されており，岩﨑はその受信機でラジオを聴くことができたのである。東京のスタジオから発信される沖縄への「激励放送」を聴いたときの心情を次のように回想している。

> あの硫黄島向け特別放送の時は，当時吾々は沖縄放送局の電波に乗せ中継したのであるが，あの惨状がなお耳の底に生々しく残っている折柄，その同じ放送が今度は沖縄に向けられたのを受信したのである。聞く番に回ったのである。硫黄島と同じ運命となり同じ結果をまねくであろうことを考えた時，聴く人の心理は如何であろう，堪えがたき苦悶と煩悶とが交叉してとおり過ぎた[45]。

硫黄島への「激励放送」は東京の電波を沖縄放送局が現地に中継していた。だから岩﨑には「激励放送」の本当の意味がわかっていた。「激励」とは，国のために立派に死ね，ということだった。

岩﨑は，繰り返し放送される沖縄への「激励放送」が次第に「悲痛な叫び」に変わっていったと記している。東京の放送局は，沖縄守備隊の「玉砕」が近いことを知っているのである。「激励放送」は岩﨑に「堪えがたき苦悶と煩悶」をもたらしただけだった。

もっとも，大方の日本軍将兵は「激励放送」など聴いている状況にはなかった。通信司令部付の岩﨑は部隊の中でも例外的だった。まして沖縄の一般住民は，もともと聴取者として

想定されていなかったはずだ。沖縄放送局が開局したのは日本本土では最も遅く，太平洋戦争勃発の4か月後，1942年3月のことである。ラジオの普及は進まず，1943年度の世帯あたりの普及率は2.3％（全国平均は49.5％）にすぎなかった。しかも電力・電波事情の悪化によってラジオは聴こえにくくなってゆき，1943年1月には月ごとの契約廃止数が新規契約数を上回るようになっていた[46)]。もともと沖縄のラジオ放送はそのような状況下にあったのであり，沖縄放送局がその活動を停止したあとの状況は推して知るべしだろう。内地からの電波を捉えるには高性能受信機が必要であり，そのような受信機を持ってアメリカ軍の砲撃の下を逃げ惑う住民などいるはずもなかった。

そんなことは軍にも政府にも放送協会にもわかっていたはずで，4月26日に鈴木首相が沖縄の「将兵各位並びに官民諸君」に送った「挨拶」は，むしろ内地の聴取者に向けて，来るべき決戦の覚悟を呼びかけたメッセージだった。内容を確認することはできないが，4月10日の「戦う沖縄島に送る」，5月3日の「戦う南西諸島に送る」も同様だったはずである。「激励放送」を装ってはいるがこれらの番組も，実は内地の聴取者に向けた放送だったと見るべきだろう。軍と運命をともにしようとしている沖縄の住民に続け――。

4. 敗戦をまたいで 1945年7月～1945年8月

最後の録音

高橋映一が遺した録音盤の最後の1枚には，軍歌「暁に祈る」「荒鷲の歌」「勝利の日まで」の3曲が入っている。「勝利の日まで」（作詞／サトウハチロー，作曲／古賀政男）はこんな歌だ。

「勝利の日まで」（放送日不明）

> 丘にはためくあの日の丸を ／ 仰ぎ眺める 我らの瞳 ／何時か溢るる感謝の涙 ／燃えて来る来る心の炎／ 我らはみんな力の限り ／ 勝利の日まで 勝利の日まで

高橋映一 録音

この「勝利の日まで」のあとには空襲警報が続く。わずか10秒。そこで録音盤は尽きている。

空襲警報（放送日不明）

> 敵は東北東より皇都に侵入●●●（数語，聞き取り不能）
> 敵は東北東より皇都に侵入●●●

高橋映一 録音

高橋が録音した戦時ラジオ放送はこれが最後となった。新しく録音盤を入手することは困難になっていたし，高橋自身もラジオ放送を録音することに興味を失いかけていたのかもしれない。この戦争は負ける。空襲下の国民の多くがそう思い始めても，なおラジオは戦争の完遂を訴え続けていた。

6月23日。沖縄で日本軍の組織的抵抗が終わったその日の夜には，陸軍大臣・阿南惟幾（あなみこれちか）

高橋映一が遺した録音盤（空襲警報）

による「国民義勇兵役法公布の上諭を拝す」が放送されている。国民義勇兵役法は15歳から60歳までの男と，17歳から40歳までの女を国民義勇戦闘隊に編成することを定めた法律だった。7月2日からは，4夜連続で『国民義勇戦闘隊解説』が放送されている。第3回の副題は「国民義勇戦闘隊は何をするか」だが，その内容は大本営陸軍部が作成し，一般に配布した『国民抗戦必携』というパンフレットから類推することができる。アメリカ兵との戦い方を図解入りで説明するもので，例えば白兵戦については，刀槍があれば「背ノ高イヤンキー共ノ腹ヲ突ケ」。鎌，ナタ，玄能，出刃包丁，鳶口なら「後カラ奇襲セヨ」などとされていた[47]。

今から見れば滑稽としか言いようがないが，軍・政府は本気だったのだし，ラジオはその本気を伝え続けた。7月3日からは，『国民義勇戦闘隊解説』と並行するように『特攻振武隊の出撃』という連続朗読劇が始められ，11日まで不定期に全5回，放送されている。最終回の副題は「神となる時」だった。国民義勇戦闘隊と特攻隊の集中編成。ラジオは国民に本土決戦の覚悟を求めていた。

フランス文学者・渡辺一夫は7月14日の日記に，吐き捨てるようにこう記している。

> 全国民は固き決意と共に百年でも二百年でも戦争をする覚悟だ，とラジオが絶叫している。結構なことだ！[48]
>
> （原文はフランス語）

日本の敗戦が決したのは，1か月後のことだった。

この巨大な負け戦をラジオはどう伝えようとしたのだろうか。

国民全部の罪と指導しよう

NHK放送文化研究所に「荘宏（しょうひろし）文書」と称されるおよそ2,700点にのぼる資料が保管されている。荘宏（1913～1987）は，1936年に逓信省に入省，戦時下の無線・放送行政に携わり，戦後は電波三法（放送法・電波法・電波監理委員会設置法）の制定・運用にあたるなど放送制度の形成に関わった。郵政省退官後はNHKに入局，監査室長を経て理事に就任している[49]。

「荘宏文書」は，そのほとんどすべてが占領期およびその後の放送行政に関するものだが，敗戦時の資料も数点ある。「局内課長会議」と題された手書き文書もその1つだ。当時，荘は逓信院（旧逓信省）電波局監理課長の職にあったこと，また表紙に「荘書記官」の文字があることから，この文書は逓信院電波局の各課長の連絡会議の議事を荘が記録したものであることがわかる。

「局内課長会議」（荘宏文書）

NHK放送文化研究所所蔵

「局内課長会議」の記述は1945年8月15日，敗戦の日から始まっている。その日の記述からは，局長から「国民生活安定」などとともに「機密文書焼却」についての話があったことがわかる。荘のメモには「予算書，全貌ガ判ル

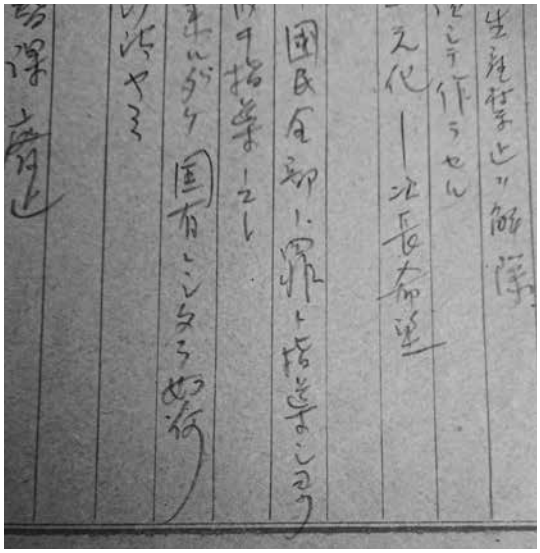
モノハ処分。資料モ工合ワルキモノハ処分」と記されている。日本放送協会が敗戦時に膨大な局内資料を焼却したことは本シリーズのはじめに述べたが，放送内容を検閲する立場にあった逓信院でも戦時文書の処分が行われていた。

8月16日の議事録には冒頭に「局長会議の結果」と記されているので，逓信院の局長会議での確認事項が課長会議で報告されたのだろう。そこでは「マックアーサー司令部ト日本トノ無線連絡」は，「現在海軍施設」が使用されているが，これを「逓施設ニ切換ヘタイ」など，11項目が記されているのだが，私の目は項目9に釘づけになった。そこにはこう記されていた。

情報局ノ輿論指導方針――国民全部ノ罪ト指導シヨウトイウコト

開いた口が塞がらない，それがこの文言に最初に接したときの偽らざる気持ちだった。そしてそのあとに，抑えがたい怒りが湧き起こってきた。

「局内課長会議」の記述



NHK放送文化研究所所蔵

情報局は，メディア，とりわけ日本放送協会を通して，戦争には勝たねばならず，そして勝てるということを，根拠もなく国民に訴え続けてきた。虚偽，誇張，隠蔽は常套手段だった。敗色が鮮明になってからも死を賭して闘うように導いてきた。300万以上の日本人が死に，それを超えるアジアの人々が犠牲となった。そのあげくに，敗戦が決したとき情報局が立てた方針がこれだった。

この，荘がメモに遺した「輿論指導方針」を読んで，「ああ，あの資料のことだな」とピンとくる読者もいるだろう。荘のメモは，政府がポツダム宣言を受諾した8月14日に，情報局が新聞・通信各社に通達した「大東亜戦争終結交渉に伴う輿論指導方針」を踏まえたものだったことは明らかだ。

以下，長くなるがあえて全文を引用したい。

大東亜戦争終結交渉に伴う輿論指導方針
八月十四日午後五時　内閣情報局

政府は今回の交渉に立ち至った経過および内容に立ち入らず全国民の結束と憤起を要望しをれり
国内の輿論は全国民の結束を保持し国体を護持して未曽有の困難に処すべきを強調すること

イ　現下最大の問題は大御心を奉戴してあくまで国体を護持して君臣親和一体，全国民一致結束して臥薪嘗胆，もって未曽有の国難に当るべきを強調

ロ　この未曽有の国難を招来したについては国民のことごとくが責任をわかち上 陛下に対し奉り深く謝し奉り匪

躬(きゅう)の誠を表し奉るとともに皇国伝統の精神を遺憾なく発揮して一切の事態に対処すべきを強調

ハ 今後この難局を打開するは戦争以上の艱難困苦にして，あくまでこれを克服して，もって一路国隆に邁進すべきを強調

ニ 時局に痛憤のあまり同胞互いに傷つけ合い，または経済，社会，道徳的混乱を惹起するにおいては皇国滅亡すべきことを強調

〔取締事項〕

イ 共産主義的，社会主義的言論は厳重に取締る

ロ ことここに至りたるに対する一般の痛憤悲哀または批判はこれを認めるも廟議決定方針に反する戦争継続論または国内結束を乱すが如き論議は厳重に取締る

ハ 軍および政府の指導層（戦争指導責任者）に対する批判は一切不可

ニ 直接行動を示唆し，または自暴的言論は厳に取締りの対象となる

〔注意〕臥薪嘗胆の意味は将来わが国の版図を拡大するための意味でなく世界平和建設のためにするとの意味を持たすこと

高桑幸吉『マッカーサーの新聞検閲』読売新聞社より

以上が「大東亜戦争終結交渉に伴う輿論指導方針」の全体である。長い引用になったが，あえてそうしたのはこの8月14日の通達を，荘宏が「国民全部ノ罪ト指導シヨウトイウコト」と要約していたことを示したかったからにほかならない。

14日の通達は元読売新聞記者・高桑幸吉による『マッカーサーの新聞検閲』（1984年，読売新聞社）に所載されているもので原資料は確認されていない。竹山昭子は「この原資料について，読売新聞社社史編集室長・水谷公彌氏を通じ高桑氏に問い合わせていただいたところ，高桑氏が当時の読売新聞関係者が筆写したものを借覧し筆写したもので，所持者は明かせないとのことであった」と述べている[50]。荘のメモは資料の実在を裏づけるとともに，情報局の通達が逓信官僚に伝わってゆく過程で，どのように理解・解釈されていったのかを物語っている。「国民全部ノ罪ト指導シヨウトイウコト」。あまりに露骨で身も蓋もないこの言葉は，しかし正確な要約と言うべきだろう。要するにそういうことなのだ。

「国民全部ノ罪」とは戦争に負けた「罪」である。軍や政府の指導層が始めた戦争が無謀だったから負けたのではない。国民の努力，忍耐が足りなかったから負けてしまったのである。だから，国民は指導層の責任を追及したりせずに，みなが「罪」を自覚して天皇に謝らなければならない。情報局の方針はそのように国民を「指導シヨウトイウコト」なのである。それは，これ以上戦争を続ければ，「我カ民族ノ滅亡ヲ招来スル」ことになるから「堪ヘ難キヲ耐ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ」，戦争を終結させるという天皇の「玉音放送」に対する国民の正しい応え方にほかならなかった[51]。

一般に戦時ラジオ放送は「玉音放送」をもって終わったとされることが多い。NHK自身，『昭和二十二年 ラジオ年鑑』で，戦時中の放送を「軍国主義，日本第一主義の押しつけ」であり，「指導層の号令であった」としたうえで，次のように述べている。

こうした戦争中のわが放送に終止符を打ったのは，昭和二十年八月十五日正午の，天皇

陛下のポツダム宣言受諾に関する終戦の御放送であり，日本の放送は陛下の御声を初めて電波にのせると共に，万世に太平を開こうとする新しい進路に踏み入ったのである。終戦とともに転換し，生まれ変わった放送の方向は，放送が民衆自身のものであり，聴取者のものである，ということであった[52]。

「玉音放送」が国民に敗戦を納得させるにあたって大きな役割を果たしたことは間違いないにしろ，『ラジオ年鑑』が言うように「玉音放送」が転換点となって，「指導層の号令であった」ラジオが「民衆自身のもの」となったわけではない。敗戦をまたいで，ラジオは相変わらず国策に沿って国民を「指導」しようとしていた。敗戦は「国民全部ノ罪」でなければならなかった。

なんか，普通だったですね

1945年8月の「確定番組」を見ると15日から23日までの9日間，浪花節や落語，音楽番組や子ども向け番組はすべて斜線で消されている。残っているのは「時報」と「報道」のみ，ラジオはほとんどニュース一色だった。そこで情報局の指導方針がどう具現化されていたのか，8月15日のニュース原稿を見てみよう。NHKに遺っているこの時期のニュース原稿としては15日のそれが唯一のものである。

この日，ラジオは正午の「玉音放送」に続き，ポツダム宣言の要旨，その受諾に至るまでの経緯などを報じ続けたが，情報局の指導方針が典型的に見えるのは，「畏くも平和再建の詔書が渙発されました」というリードで始まるニュースである。原稿は「共同宣言受諾―平和再建の大詔渙発―」と題する同盟通信の配信記事に手書きで修正を加えたものだ。日本放送協会報道部が，同盟の配信記事をより国策に沿う形に書き換えていたことは本シリーズ第1回に詳述したが，ここではそういう書き換えは見られない。リードに続けて政府が「聖断を仰いで」，ポツダム宣言の受諾を決したことを伝え，聴取者に次のように語りかけている。

国体護持の最後の一線は確保されたとはいえ，我らの力足らずしてここに至ったのであります。しかし，この悲痛な事実を招いたのは今や何れの人の責にも帰すべきではありません。（中略）国民の一人一人は強い自責の念以て，この現実を直視し，おほらかな心もて傷つける戦友をいたわり，深い友愛心もて相共に扶け導き，もってこの国家民族最大の苦難を打開しなくてはなりません。

竹山昭子も指摘していることだが，これは情報局の「輿論指導方針」そのものと言っていいだろう[53]。日本は戦争に負けた。だが，誰も責めてはならない。政府も軍も，そしてメディアも。戦争に負けたのは「国民全部ノ罪」なのだから。

8月15日以降も，ラジオは国策の宣伝機関として放送を続けていた。ニュースだけではない。斜線だらけの「確定番組」をつぶさに見ると，例えば8月22日の夜7時台には，次のような手書きの書き込みがある。

報道のあと 朗誦（承詔必謹）
「大君の」釈迢空（しゃくちょうくう）作，「聖断」斎藤茂吉作

茂吉が敗戦の日につくった「聖断」はこういう歌だ。

聖断はくだりたまひてかしこくも
畏(かしこ)くもあるか涙しながる

承詔必謹とは，天皇の言葉を承れば必ず謹めよ，の意である。敗戦から1週間，報道と連動して終戦の詔勅を改めて心に刻むという編成意図だった。

繰り返すが，「玉音放送」を境にラジオが180度の転換を果たしたというようなことはない。当時，報道部で録音番組を担当していた飯島陽三（2010年取材当時92歳）は，敗戦直後の報道部の空気を次のように語っている。

「なんか，普通だったですね，不思議なくらい。降伏してアメリカ軍が来れば，放送局も今までどおりってわけにはいかないだろうってことは，なんとなくわかってましたけどね，でも正直なところあんまり緊張感もなかったなあ。NHKがつぶされるとは思わなかったかって。そんなことは考えませんでしたね。それまでと同じように仕事してたような記憶しかないんです。惰性というのかな[54]」

放送現場には，少なくとも飯島には8月15日で実線が引かれたという意識はなかった。放送の内容は変わっても，日本放送協会が政府の管理下に置かれ，その意を伝えていることに変わりはなかった。飯島の言葉を借りれば，不思議なくらい普通に時は過ぎた。そして8月24日の「確定番組」からは放送中止を示す斜線が消えている。この日に復活した番組には，『少国民の時間』『国民合唱』などがある[55]。戦時下につくられた大時代な番組タイトルがそのまま使われていた。惰性。飯島の言葉のままだった。

だが，もちろん，飯島にもわかっていたとおり，放送局がそれまでどおりでいられるはずはなかった。8月25日には夜7時の時報，報道に続いて情報局総裁・緒方竹虎が「連合軍の進駐を前にして」と題する講演を放送している。メディアを統制する権力のバトンが，情報局から連合国総司令部に渡されようとしていた。

敗戦と占領。その間にラジオはどう変わったのか，何が変わらなかったのか。そしてサンフランシスコ講和条約によって日本が独立を回復したとき，放送はどのような道を目指したのだろうか。次回で考察したい。

第7回 了

（おおもり じゅんろう）

※資料の引用に際しては，旧字を新字に，旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた箇所がある。また，読みやすさを優先して，カタカナをひらがなに改めた場合，句読点やルビを追加した場合もある。

注：

1）大森淳郎（2017）「戦争とラジオ〈第1回〉国策的効果をさらに上げよ～同盟原稿はどう書き換えられていたのか（前編）～」『放送研究と調査』2017年8月号
2）筆者によるインタビュー（2009年4月）
3）「戦時国民思想確立に関する基本方策要綱」『大東亜戦争 放送指針彙報』第三十三集
4）「ケゼリン，ルオットの発表と放送」『大東亜戦争 放送指針彙報』第三十四集
5）「当面の放送指導に就いて」『大東亜戦争 放送指針彙報』第三十五集
6）東京逓信局放送部長・柴橋國隆「新たなる出発に際して」『大東亜戦争 放送しるべ』第十八集
7）竹山昭子（2005）『史料が語る太平洋戦争下の放送』世界思想社，41頁
8）「豆宣伝の一例」『大東亜戦争 放送指針彙報』第三十七集
9）小川和夫「ラジオ太郎について」『放送研究』1942年6月号
10）館野守男「戦時放送とアナウンサー」『放送研究』1942年4月号
11）横山重遠「決戦と放送」『放送』1944年1月号

12）柳澤恭雄（1995）『検閲放送―戦時ジャーナリズム私史―』けやき出版，55頁
13）作曲家・林光は，この歌は7月18日の大本営発表と同時にラジオで発表されたと証言している（山中恒『新聞は戦争を美化せよ！―戦時国家情報機構史―』小学館，2001年，675頁）。ただし，「確定番組」では確認できない。
14）『国民合唱』については，本シリーズ第5回後編（『放送調査と研究』2019年12月号）参照。
15）防衛庁防衛研修所戦史室（1967）『戦史叢書 中部太平洋 陸軍作戦〈1〉マリアナ玉砕まで』朝雲新聞社，507頁
16）「崎山正毅・宮本吉夫・荘宏氏にきく」（1974年6月13日）NHK放送文化研究所所蔵
17）「空襲時ノ人員配置論」前編・後編，NHK放送文化研究所所蔵
18）「世界の戦局」『放送』1944年10月号
19）大岡昇平（2018）『レイテ戦記（一）』中公文庫，86頁
20）「放送解説委員の創設」『大東亜戦争 放送指針彙報』第四十一集
21）「十月の放送企画会議より」『大東亜戦争 放送指針彙報』第四十集
22）同上
23）前掲「放送解説委員の創設」
24）前掲『検閲放送―戦時ジャーナリズム私史―』72頁
25）矢部謙次郎「一億，第一線に立つ」『放送』1944年12月号
26）朝日新聞1944年12月17日朝刊
27）森繁久彌（1980）『こじき袋』中公文庫，175頁
28）朝日新聞1945年1月2日朝刊
29）御厨貴監修（2006）『歴代総理大臣伝記叢書 第31巻 小磯国昭（下）』ゆまに書房，806頁
30）同上，809頁
31）高見順（1991）『敗戦日記〈新装版〉』文春文庫，102頁
32）同上，112頁
33）梯久美子（2005）『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』新潮社，20頁
34）同上，23頁
35）大本営「航空作戦ニ関スル陸海軍中央協定研究（案）」（前掲『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』113頁から再引用）
36）前掲『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』24頁
37）前掲「戦時放送とアナウンサー」
38）「激励放送」とは，太平洋や大陸の前線に向けて短波によって放送したもので正式な名称は「特定前線地域向け放送」。この放送が国内に向けて中波で放送されることもあった。
日本放送協会編（2001）『20世紀放送史』上，174頁～175頁
同編（1977）『放送五十年史』169頁～170頁
39）小笠原戦友会編（1969）『小笠原兵団の最後』原書房，74頁。ただし，「確定番組」など他の資料で同放送を確認することはできない。
40）同上，75頁
41）長澤泰治（2008）『NHKと共に七〇年―わが回想の九〇年』藤原書店，90頁
42）同上，91頁
43）伊佐眞一（2007）『伊波普猷批判序説』影書房，71頁～86頁
44）毎日新聞1945年4月12日朝刊
45）岩﨑命吉の手記「思い出 沖縄の潰滅」NHK放送文化研究所所蔵
46）日本放送協会総合放送文化研究所放送史編修室（1971）『放送史料集4 沖縄放送局』（部内資料）26頁～29頁
47）林博史「国民を戦闘に参加させるためのマニュアル――大本営陸軍部『国民抗戦必携』」『季刊 戦争責任研究』No68（2010年夏季号）
48）渡辺一夫著，串田孫一・二宮敬編（1995）『渡辺一夫 敗戦日記』博文館新社，59頁。日記原文は，日本語とフランス語で書かれているが，引用箇所はフランス語。
49）荘宏の略歴，および「荘宏文書」については，村上聖一「放送史料探訪『荘宏文書』～放送政策形成の現場から～」『放送研究と調査』（2012年1月号）によった。
50）竹山昭子（1994）『戦争と放送』社会思想社，241頁，注43
51）それは，東久邇宮（ひがしくにのみや）稔彦（なるひこ）首相による，いわゆる「一億総懺悔論」に連なってゆく。
1945年8月28日，東久邇宮は記者会見の席上，「国体護持」について理屈を超越した「信仰」であるとしたうえ，次のように述べている。「この際私は，軍官民，国民全体が徹底的に反省し懺悔しなければならぬと思う。全国民総懺悔をすることがわが国再建の第一歩であり，わが国内団結の第一歩と信ずる」（朝日新聞1945年8月30日朝刊）
52）『昭和二十二年 ラジオ年鑑』6頁
53）前掲『戦争と放送』218頁参照
54）筆者による聞き取り（2010年5月）
55）ただし，あくまで「確定番組」上のことであり，当時の混乱を考えれば実際の放送にはなかった可能性も否定できない。